

稲 荷 講

昭和の中頃までは金井は上と下に分れていた。上金井が今の会館から七曲りまで、下金井は会館から学校（横浜寄り）附近までであった。旧農家20数戸が一丸となって稲荷講の組織を持っていた。

秋の先の収穫時に餅米を少量づつ持ち寄って赤飯の一部にした。これは篤祭と同じ組織で初午の日を当日とした。子供は朝そこへ行って赤飯を食べ、学校児童はその赤飯を弁当に持っていった。

稲荷講の稲荷様は農家の守り神として崇拝された。

当番の家には稲荷講の目印として幟りをたてた。稲荷様は農家数戸位で維持していた。

以上の稲荷講は昭和10年頃まで続き、戦時中になって解散となってしまう。